

居住環境にみる真菌分布の特徴

○中西礼子* 田中辰明** 相原真紀*

(*お茶大・院, **お茶大)

【目的】近年、住宅の高気密高断熱化により快適な環境で過ごせるようになったが、それに伴って問題になったことの一つに真菌の増殖があげられる。そこで一般住宅内における真菌分布について調査し、影響が大きいと考えられる温湿度環境との比較を行った。

【方法】横浜市にある賃貸集合住宅で、1996年7月より毎月1回調査を行った。この住宅には社会人女性が一名生活している。調査は主に壁や床に付着している真菌を対象にしており、106カ所のサンプリング点を定め、各地点において10cm×10cmの範囲を滅菌スタンプスプレードで拭き取り、それをPDA培地、M40Y培地に塗布し、1週間から10日間培養後同定を行った。また同時にデータロガー、自記記録計、サーモカメラを用いて、温度、湿度の測定を継続して行った。

【結果】特に真菌数が多く検出されたのは、菌種は異なるが北側洋室の収納、南側和室の押入、洗面台の下等、いずれも比較的高湿である場所であった。例えば1997年12月の平均相対湿度をみると、北側洋室は47.0%、収納は57.0%であった。また部屋の壁の上下差をみると下の方が真菌数が多い傾向がみられた。同じく平均相対湿度を比較したとき、上：44.7%、中：44.8%、下：51.4%と下の方が高くなっていることが要因の一つと考えられる。以上の結果から、一般住宅内での真菌汚染は、相対湿度が大きく影響しているものと結論された。